

発達検査用具を使った子どもの自発活動の観察

— 「自発活動尺度」作成の試み —

榎本弘子*・久保和子**・藤田弘子

Analytical Judgement on Toy Play Behavior of Infants

— View Points of developmental Psychology —

HIROKO ENOMOTO, KAZUKO KUBO and HIROKO FUJITA

はじめに

著者らは、障害児の発達相談を経験する中で、発達検査の課題を達成できない場合でも、その用具をもちいて、かなり高度と思われる遊びを楽しんだり、検査者をはっとさせるような認知能力を発揮していることに気づくことが度々あった。したがって、実施法で定められた評価以外にも、子どもの活動を評価できる尺度があれば、子ども、なかでも障害児の能力をもっと多面的に見いだせるのではないか。ここにひとつの例を示そう。

子どものことばの遅れを主訴とした母親と話をしていた時のこと、子どもは、新版K式発達検査（以下K式と略す）¹⁾の○△□のはめ板と、2.5cm角の赤い積木で遊び始めた。その子どもは、はめ板の3つの孔に赤い積木をほぼ同数入れ、その後、はめ板に入る円板を取りだし赤い積木をチョココンと1つのせ、「ケーキ」と言って楽しそうにしていた。急に、私は、赤い積木が『いちご』に見えてきた。その時、子どもは、与えられたもので自分の内からの思いを表現して遊ぶものだ、と私は感じたのである。

3つのはめ板にはほぼ同数づつ入れていくのは、田中のいう対配分概念²⁾が形成されていることを示すものであり、また、白い円板と赤い積木を組み合わせて「ケーキ」と見立てたのは、象徴機能のあらわれ³⁾と言えよう。子どもは物を目の前にするやいなや、独自の物の扱い方に対応し、ときには、経験と想像力を駆使して、大人の既製概念を超えた活動をするものである。

本論文は従来の発達検査に使用されている用具の一部を利用し、子どもはそれらの用具でどのように遊ぶかを観察すること、そして遊びを分析する尺度の構築を、試

みるものである。ここではその尺度を「自発活動尺度」と命名し、評価のポイントとその理論的意義を先陣の研究からえるべく努める。

「自発活動尺度」の作成

1 「自発活動尺度」の評価ポイント

第1に子どもの自発性である。用具を子どもの前に呈示し、その活動を観察する。第2に用具に触発され、どのような遊びが展開するか。つまり、発達の量的側面ではなく、質的側面を測ることを目的とする。第3に簡便さである。検査に長い時間をかけることなく、通常の保育や、生活の中でも容易に取り入れられる方法であり、加えて、専門的な熟練者でなくとも判定可能な評価法であること。第4に1つの用具から多面的評価を導くことである。従来の検査では、記憶や手指操作など、どの発達の側面をみるかを予め考えた項目が設定され、その項目が達成できるか、できないかで評価がなされている。それに対し、自発活動尺度では、1つの用具について、子どもがいかなる関心を示し、その物をどのように扱うか、言語や表情をつかって、どのような表現をするのか、多面的要素を取りだして評価する。

II 使用した用具

乳幼児の自発性を誘発しやすいと思われる、やや非日常的な用具を選択した。

ゲゼルらは、「小児は丁度玩具で遊ぶように検査器具に反応を示す。しかし検査者にとっては、それらは発達状態を示す行動型を現させるためのコントロールされた手段となるのである。」⁴⁾と述べ、2.5cm角の積木、小球（K式においては小鈴）、ベル、ボールなどを検査用具として選んでいる。新版K式発達検査¹⁾においても、課題を子どもの前に呈示し、観察することに主眼において

* 樟蔭東女子短期大学

** 四天王寺慈悲田院通園施設

いる。著者らも2.5cm角の積木や、はめ板、課題箱は子どもの前に置くだけで、即座に反応が得られることを経験している。逆に、大きめで四角や三角の色つきの積木、ぬいぐるみ、ミニチュアのケーキなど、日常のおもちゃとして子どもが接しているものは、大人との遊びや子ども同士の遊びから、それまでに学習している慣習的なごっこ遊びを引きおこしやすいと考える。したがって、より抽象的な形をもつか、あるいは創作活動を誘発しやすい用具をK式¹⁾から選んで用いることとする。

用具は表1に示した。

表1 用具一覧

項目	示 物
①紙とペン	15×15cmの淡い色の折り紙、キャップと本体が黒いフェルトペン
②課題箱	500cc牛乳パックの表面に淡黄色の色紙を貼り、大小の穴をあけた物(以下、箱と略す) 小輪1、 白いボタン数個が入った透明フィルムケース(以下、筒と略す)
③積木	発達検査に用いられている2.5cm角の積木10個
④ねんど	赤と白の小麦粉ねんどの固まり(各100gの小麦粉使用)



①紙とペンでは、描く道具としてのペン、描かれる素材としての紙の扱い方、②課題箱では、しまう、出すの定位操作、③の積木では造形、④K式には含まれていないが、ねんどを加え、自由に形を変えられる素材をどう扱うかを中心に見ていく。

III 呈示方法

最初に①紙とペン、次に②課題箱、③積木、④ねんどの順に実施する。声がけを「これで遊ぼうね」、「これで遊んでごらん」などとし、具体的な扱い方については何も言わず、各々3～4分間、遊びの区切りがつくまで、子どもの行動を見守る。できあがった描画、積木やねんどでの構成物に対して、「これ何?」と問う。

IV 自発活動尺度の理論的背景

自発的な行動を分析するためには、どのような分類に基盤をおけばよいか。「小児は丁度玩具で遊ぶように検査器具に反応を示す。」⁴⁾とゲゼルが言っているように、自由で、自発的な活動は、すなわち遊びである。そこで、遊びの分類方法を参考に、その尺度を求めてみる。遊びを発達の観点から分類しているものには、ローゼンブラッド⁵⁾、高橋⁶⁾、西川⁷⁾などの研究がある。今回は高橋の分類を参考に自発活動尺度を考えてみた。また、判定の

方法は田中の「子どもの発達と診断」²⁾に述べられている発達段階を参照する。

1. 高橋の遊び分類

乳幼児の遊びを論じた高橋は、おもちゃの扱い方の発達の変化を以下の7つに分類している⁸⁾。

- (1) 感覚運動的→描写的：それまで手に取ったものは、何でも口に入れていたのが、動作パターンを区別し、スプーンやフォークだけ口に入れる。
- (2) 単一→連結：ひとつの物を扱っていた状態から、物同士を関連づけて用いるようになる。たとえば、カップ、受け皿、スプーンなどを組み合わせて遊ぶようになる。
- (3) ふり行為の出現：目前の対象物のみを扱っていた状態から、空想の物を想定し、たとえば、想像上のケーキをレプリカのお皿から食べるふりができる。
- (4) 見立ての出現：動作の遂行のために、物を変換させ、見立てる。たとえば、積木をケーキに見立てて用いる。
- (5) 断片的な動作パターン→つながりのあるパターン：脈絡なしに電話のダイヤルをまわし、積木を積んでいたのが、積木で家を見立てて作り、友人に電話をかけ、一緒に食事するなど、話のつながりがでてくる。
- (6) 自分に向けていた行動を人に向ける：自分の髪にブラシをかけていたのが、別の人や人形にブラシをかける。
- (7) 人形を動かす。人形に何かさせる：(6)のパターンがさらに進歩した形で、たとえば、人形に車の運転をさせる。

この7つのうち、(5)～(7)は健常児では、2歳半以降にあらわれる項目であり、ダウン症候群児1～10歳に実施した結果、その発達状況から(5)以上に達するものがなかったため、(4)までを採用する。

2. 田中の論じた活動の発達順序

田中は、その著書「子どもの発達と診断」²⁾のなかで、描画、積木、ねんど活動の発達を以下のように述べている。

a. 描画

ペンを紙に打ちつける点描画(12カ月)→なぐりがき(17カ月)→ひとつづきのぐるぐる円である円錯画(18カ月)→横線、縦線、円など止める意識のある描画(2才前半)→絵や字のつもりで描き、何を描いたか言える(2才後半)→客観的にわかる絵や字を描く(3才後半～4才後半)。

b. 積木

積木を口へもっていき、払い落とす(6カ月)→積木同士を打ち合わせテヨチヨチする(10カ月)→積木を垂直に2個積む(12カ月)→積木を3個積む(18カ月)→10個の積木で縦横2方向性を持った構成をする(2才

なかば)→縦横に前後の軸がはいつた、3方向性を持つ構成をする。(3才なかば)。

c.ねんど

親指の先を力を入れて押す、ひっぱる、ちぎる(1才後半)→丸める、こねる(2才後半)→造形表現し、作った物に名前をつける(3才前半)。

V 「自発活動尺度」

本研究では、物の扱いを軸として、(1)感覚運動的→描写的、(2)単一→連結。象徴機能を軸として、(3)ふり行為の出現、(4)見立ての出現を観察することとする。

なお、たとえば、同じように、ペンで描画をしたとしても、なぐりがきとヒトの顔を描くのでは、描写的活動の質が異なるので、描写的活動は2レベルに分類し、描写的Iは少なくとも、その用途に応じて用いる活動、描写的IIはその用途に応じて用い、Iより高度な活動を示す。また、遊びの分類以外に、言語性の分類も加味した。子どもは遊びの中で、自分の構成物を命名したり、擬態語を発することが考えられる。これをことばによる『ネーミング』として、有無を確認した。

表2にチェックリストを示し、以下具体的な状況を述べる。

1.物の扱い①-a何もしない：目の前に提示された用具に対し、さわることもしない。b感覚運動的：その用具本来の扱い方をせず、口にいたり、投げたり、叩いたりする。c描写的I：用途にあった使い方ができるが、表現が未熟である。d描写的II：用途にあった使い方ができ、表現したいものが検査者に伝わる。

紙とペンでは、b感覚運動的の活動例は、ペンをなめる、たたく、落とす、かざして見る、紙をヒラヒラさせるである。c描写的Iでは、ペンを描くもの、紙を描かれる素材と理解して扱うことが条件であるから、なぐりがき、円鉛画、線描、円がこれに含まれる。d描写的IIでは、自分の描きたいもの、絵や字が書ける。つもりで描いたものも含める。

課題箱、これは、定位をねらった用具である。しまう動作に着目せず、筒を振って音を楽しんだり、箱で遊ぶ活動を、b感覚運動的の活動に含む。c描写的Iでは、空いている箱穴に着目し、筒や小鈴を入れる。しかし、大小の穴を区別することなく定位する。d描写的IIでは、大小の穴に注目して、大には筒を、小には小鈴を定位する。

積木は積んで遊ぶものであると定義して、b感覚運動的では、なめる、落とす、打ち合わせ、叩く活動を含む。c描写的Iでは、1つ以上の積木を上積みする。d描写的IIでは、少なくとも2方向への構成を含む。

ねんどは、丸めたり、こねて形のかわる素材であると定義して、b感覚運動的の活動はねんどをひっぱる、ちぎる。c描写的Iでは感触を楽しむように丸めたり、こねる。d描写的IIでは自由に造形を楽しむ。と分類することにする。

2.物の扱い②-a何もしない：物を扱わない。b単一：ひとつの物しか扱わない。c連結：2つ以上の物を関連づけて用いる。

3.象徴機能①-aふり行為なし：IVの1.高橋の分類(3)にみられるような、ふり行為、つまり、自分が表現したい物を空想し、あたかもそれを扱うように身ぶりをする行為がみられない。bふり行為あり

4.象徴機能②-a見立て行為なし：IVの1.高橋の分類(4)にみられるように、用具を慣用的ではなく、自分が表現したい物の代替として扱う、見立て行為がみられない。b見立て行為あり

5.ネーミング-a構成物に命名しない。b構成物に命名し意味づける。

「自発活動尺度」を使った事例研究

1歳から10歳のダウン症候群児48名に「自発活動尺度」を用いて観察を行ったところ、結果は以下のごとくであった。①紙とペンでは、2歳で全員が描写的扱いが可能となり、5・6歳になると半数以上の子どもが絵や字に興味を持ち、ネーミングしながら描く。②課題箱でも、2歳で全員が描写的扱いが可能となる。穴の大小への入れ分けは7歳以降である。③積木では、2歳で、半数近くが2方向への構成である描写的扱いIができ、5・6歳では、3方向への構成が可能となる。④ねんどでは、3・4歳の半数の子どもが形作りをし、ネーミングをしている。2歳以上では、ほとんどの子どもが身近にあるペン、おもちゃのはめ箱や積木を、大人が使っている用途、つまり、物の慣用的使用を理解し、扱うことが可能であることがわかった³⁾。

ここでは、1歳0カ月男児、3歳9カ月女児、6歳3カ月女児の3例のダウン症候群幼児の姿を描くことで、具体的な評価過程を示す。

ケース1 1歳0カ月男児K、T。1988・11・8生まれ
兵庫県立塚口病院小児科赤ちゃん体操親子教室に通院中である。周産期に問題なく、心臓疾患はない。K式による発達年齢(以下DAと略す)は9カ月、発達指数(以下DQと略す)は75であった。

①紙とペンでは、紙をくしゃくしゃにし、ペンを振った後、下に落とした。②課題箱では、筒を落とした後、小鈴をつかんでいる。③積木では、2個の積木をとり、

表2 自発活動尺度チェック

①紙とペン	物の扱い	1 - a 何もしない b 感覚運動的 - さわる、口にいれる、投げる、たたく、やぶる c 描写的 I - 折る、描く [点描、円錯、横線、円] d 描写的 II - 絵・字 2 - a 扱わない、b 単一、c 連結 注目したもの [ペン・紙]	
	象徴機能	3 - ふり行為 a なし、b あり 4 - 見立て行為 a なし、b あり 5 - ネーミング a なし、b あり	
②課題箱	物の扱い	1 - a 何もしない b 感覚運動的 - さわる、口にいれる、投げる、たたく、やぶる c 描写的 I - とにかく定位する d 描写的 II - 大小に入れ分け 2 - a 扱わない、b 単一、c 連結 注目したもの [箱・筒・小鈴]	
	象徴機能	3 - ふり行為 a なし、b あり 4 - 見立て行為 a なし、b あり 5 - ネーミング a なし、b あり	
③10個の積木	物の扱い	1 - a 何もしない b 感覚運動的 - さわる、口にいれる、投げる、落とす、たたく、[机・積木] c 描写的 I - 積む、並べる (個) d 描写的 II - 2方向・3方向への構成 2 - a 扱わない、b 単一、c 連結	
	象徴機能	3 - ふり行為 a なし、b あり 4 - 見立て行為 a なし、b あり 5 - ネーミング a なし、b あり	
④ねんど	物の扱い	1 - a 何もしない b 感覚運動的 - さわる、口にいれる、投げる、落とす、たたく、[机・ねんど同士] ひっばる、ちぎる c 描写的 I - こねる、まるめる d 描写的 II - 造形 [団子・扁平] 2 - a 扱わない、b 単一、c 連結	
	象徴機能	3 - ふり行為 a なし、b あり 4 - 見立て行為 a なし、b あり 5 - ネーミング a なし、b あり	

チョチチョチと打ち合わせている。④ねんどでは、触った後、口に持っていった。

物の扱いにおいては、すべての用具に対して、感覚運動的扱いをし、慣用的使用を理解していない。積木以外のほとんどの用具を単一で扱っている。また、象徴機能の現れである、ふり行為、見立て行為は出現していない。ネーミングも見られていない。

ケースII 3歳9カ月女児M. Y. 1985・10・2生まれ

地域の精神薄弱児通園施設に通所中である。周産期に問題なく、心臓疾患もない。K式によるDAは2歳6カ月、DQは67であった。

①紙とペンでは、紙を描かれる物、ペンを描く道具と理解し、ぐるぐるの円や、上下の往復線を描き、「オバケ」、「オモチャ」と命名したり、線を書き「マイコ」と自分の名前を言う。②課題箱では、ボタンを大きい穴に入れ、その後、筒などを横から入れ、大きい穴に出す。ボタンに「オカネ」と命名する。③積木では、垂直方向に2個の塔にし、「クルマ」と言う。その後、垂直方向に5個の塔を2つ作り、ひとつに「マイコ」、もうひとつに「オカアチャン」と命名した。④ねんどでは、押ししたり、ちぎったりした後、白い団子の上に赤いねんどを伸ばしたものをのせた構成物を作り、「クルマ」と言う。そのあと、白いねんどを机の上に伸ばしていき、その上に赤いねんどを一部だけ残して同様に伸ばし、「コトリ」を作っていた。

本児は描写的扱いができ、2つ以上の物を連結して扱うことができる。紙とペンでは絵や字が、課題箱では大小への入れ分けが、積木では3方向への構成がまだ見られず、描写的Iの物の扱いレベルにあるが、物の本来の用途をすでに理解している。また、その上で、用具を触っていて、構成した形から連想される物を命名したり、自分が表現したいものを作り出したりできる。これは、見立て行為であり、本児に象徴機能が備わっていることが明らかになった。

5個の積木の塔を「マイコ」、「オカアチャン」と、物を擬人化し、命名できる。ただし、擬人化した物に何かしたり、何かさせる、脱中心化の扱いはできていない。

ケースIII 6歳3カ月女児F. K. 1983・5・8生まれ

地域の精神薄弱児通園施設に通所中である。周産期に問題はなかったが、心臓疾患があり、2歳のときに手術を受けた。K式によるDAは3歳5カ月、DQは55であった。

①紙とペンでは、明らかに「け」の字を書ける。「け」は本児の名前の頭文字である。その後は、ひらがなを書いているつもりで小さなぐるぐるの円を幾つも書く。②課

題箱では、まず筒を振る。大きい方のボタンを指さし「コレ オオキイ オトウサン、オカアサン」と言う。筒を大きな穴へ、小鈴を小さな穴に入れ分ける。③積木では、垂直方向に10個の塔を作る。その後、検査の直前、ひさしぶりに会った友人サチちゃんの日、鼻、口にたとえて、4つの積木を点在させ、「サチノカオ」と命名した。④ねんどでは、赤いねんどのみに着目し、押しした後、「ハンバーグ」を作っている。

ねんどにおいては、赤白2つのねんどを連結して使用していないが、それ以外では物を連結させている。積木においては、3方向には至らず、描写的Iの物の扱いに留まる。しかし、それ以外の用具においては描写的IIの扱いを示している。見立てもでき、特に、積木で作った「サチノカオ」には、驚嘆させられる。赤いねんどの塊から、ハンバーグを連想したのとは異なり、自分が表現したい友人の顔を、その材質からはかけ離れた積木で表したのである。M. Y. の事例と同様、本児も物を人のかわりに用いることが可能である。

考 察

ほぼ用具が一致している①紙とペン、③10個の積木の項目について、「自発活動尺度」と従来の発達検査であるK式の評価を比較し、本研究尺度の利点について考察する。

1 評価比較

1 紙とペン

K式の用具は、B4白色描画用紙と筆圧がわかる赤鉛筆であり、本尺度の用具はB4のほぼ1/4、描画範囲の限定される15×15サイズの色紙と、乳児でも描きやすいフェルトペンである。用具の差異はあるが、慣用的扱いを理解できる年齢になれば、子どもは描かれる物、描く物として2法の用具を同様に扱った。

呈示方法と評価は、2法で異なる。

K式項目は、発達順に、なぐり書き例後、なぐり書き例前、円鉛筆模倣、横線模倣、縦線模倣、円模写、十字模写例後、十字模写例前、正方形模写、三角形模写、菱形模写の11項目である。実施は、手本図版呈示、例示を適宜行って、子どもを観察する。すなわち、紙の上にペンを置き、「なにか書いてごらん」となぐり書きを促したり（なぐり書き例前）、形の手本図版を提示して、その模写を観察したり（円、十字、正方形、三角形の各模写）、なぐり書きやぐるぐるの円、縦横線を例示して（なぐり書き、円鉛筆、横線、縦線、十字の各例後）子どもの行動を誘発するのである。また、「描画活動に対する興味とその能力をしらべる」⁹⁾とあるように、前提とし

て、人とのやりとり、相手の意図のくみとりを要求している。

それに対し、本尺度の呈示は、年齢を問わず紙とペンを子どもの前におくのみにとどめ、子どもが物との関係をどうとっていくかを明確にしようと試みている。評価では、子どもは紙やペンに手をふれない、紙あるいはペンを口に入れる、たたくなど感覚運動的扱い、点描から形の描画を含んだ描写的Ⅰ扱い、絵や字を描く描写的Ⅱの4段階と区別し、すべての子どもの活動がこのうちのどれかに該当するように設定されている。

たとえば、ケースⅠの男児は自発的には紙をくしゃくしゃにし、ペンを振った後、下に落としている。K式においては、最初の項目である例示されてのなぐり書きができないが、本尺度においては、感覚運動的扱いの段階にあると評価でき、少なくとも物に対しては活動を起こす段階にあることがわかる。

また、検査者のペースで進められるK式に比べ、本尺度は子どもの内にある興味を引きだせる。すなわち、子どもが自分をとりまく環境から何を取り込んでいるかが明確になる。たとえば、ケースⅢの女兒の事例からは、自発的に「け」の文字を書き、絵より文字に興味があり、施設や家庭保育の中から、自分の名前を意識し始めていることが推察できる。

2 積木

その慣用的扱いを理解したうえで、子どもは、自分の表現したいものを用具を使ってあらわす。ケースⅡでは、

積木の塔2個、5個を自分や家族だと命名し、ケースⅢでは、積木4個を点をさせ、友人の顔を表現した。本尺度は子どもの表現方法を誘発しえると言えよう。

Ⅱ 「自発活動尺度」の利点

本尺度の1番の利点は、自発性にある。従来の検査においては、用具の取り扱い方や評価点が画一であり、子どもは大人の期待した行為をしたときのみの評価点が得られる。しかしながら、子ども、とくに障害児は課題を達成するまでに数々の施行錯誤を重ねつつ、記憶力や認知力、また言語力を養っていくものであり、そのような兆しは、自発性を重視する自発活動の中に読み取ることが可能である。

2番目の利点は、実施が簡単なことである。評価に比較的熟達を要しないことである。子どもの発達年齢を類推して例示を変える従来の発達検査に比べ、例を示さずに「これで遊んでごらん」と言葉がけることは、呈示が簡便である。とくに、子どもの自由な活動をいくつかの尺度にしたがい、手指の操作、文化的あるいは社会的意味をどの程度理解しているかが評価でき、寛容な発達評価が可能である。

もし、保育に携わる人が、このように子どもの行動観察から多面的な評価をできるようにになれば、大まかな児の発達段階や遊びの特質を知る訓練にも通じ、しいては、発達にあった、さまざまな行動を保育の中でひきだし、助長していくことで子どもは次の発達段階へと進んでいくのではないかと考える。

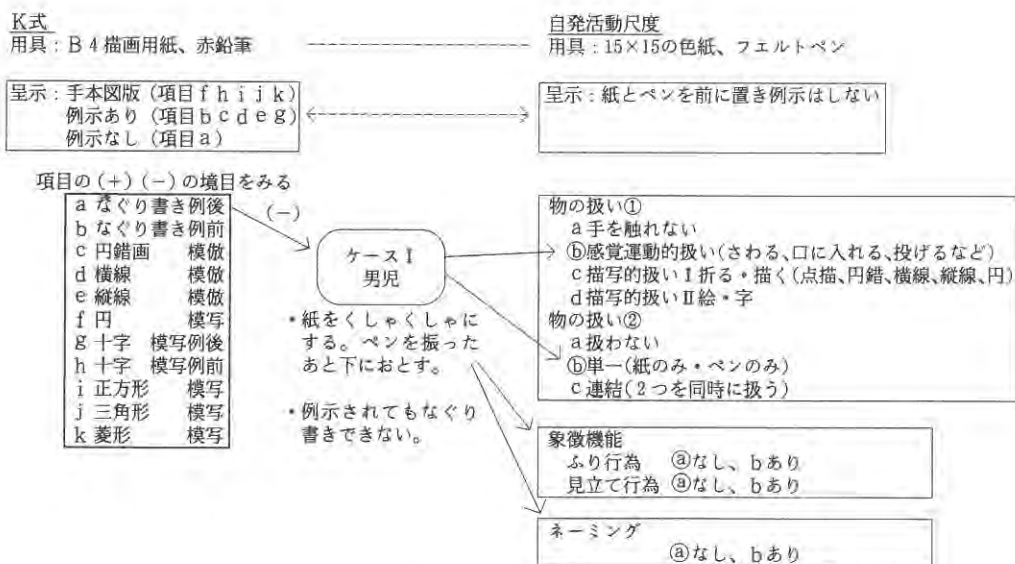


図1 評価比較 紙とペン

要 約

子どもに用具を幾つか呈示し、児が用具をどのように扱うかを観察し、子どもの自発的活動を、発達の観点から分類する尺度作成を試みた。尺度には次の特徴を持たせた。第1に子どもの自発活動に注目すること。第2に大まかに発達の段階を把握すること。第3に簡便であること。専門的な熟練がなくとも判定可能な項目であること。第4は1つの項目から物の扱い、ことば等、多面的評価を導くことである。

用具は①紙とペン、②課題箱（500ccの牛乳パックに手を加えた物）、③10個の積木、④赤と白の小麦粉ねんどである。用具を呈示し、各々3～4分間、遊びの区切りがつくまで、子どもの行動を見守り、子どもの自発的活動を以下の尺度で評価する。

1. 物の扱い①—a 何もしない。b 感覚運動的：その用具本来の扱い方をせず、口にいれたり、投げたり、叩いたりする。c 描写的Ⅰ：用途にあった使い方ができるが、表現が未熟である。d 描写的Ⅱ：用途にあった使い方ができ、表現したいものが他者に伝わる。

2. 物の扱い②—a 何もしない。b 単一：ひとつの物しか扱わない。c 連結：2つ以上の物を関連づけて用いる。

3. 象徴機能①—a ぶり行為なし：用具と空想上の物で遊ばない。b ぶり行為あり

4. 象徴機能②—a 見立て行為なし：物を見立てて用いない。b 見立て行為あり：用具の用途は知っているが、その用途とは異なった用い方で、自分の活動を表現しよ

うとする。

5. ネーミング— a 構成物に命名しない。b 構成物に命名し意味づける。

参考文献

- 1) 嶋津峰眞, 生澤雅夫, 中瀬 惇: 新版K式発達検査実施手引書, 京都国際社会福祉センター, 1983
- 2) 田中昌人, 田中杉恵: 子どもの発達と診断3 幼児期Ⅰ, 大月書店, 1984
- 3) 高橋たまき: 乳幼児の遊び—その発達プロセス, 新曜社, p26, 1986
- 4) A. Gesell and C. Amatruda, 新井清三郎 訳: 新発達診断学, 日本小児医事出版社, p20, 1983
- 5) Rosenblat, D.,: Developmental trends in infant play. Spastics International Medical Publications, 1977
- 6) 高橋たまき: 乳幼児の遊び—その発達プロセス, 新曜社, p10, 1986
- 7) 西川知晶: ダウン症2・3歳児の象徴機能の形成—母子相互作用の影響—, 大阪市立大学生活科学部児童学科卒業論文, 1987
- 8) 久保和子: ダウン症候群・学童の『自発遊び』における発達の評価, 大阪市立大学生活科学部児童学科卒業論文, 1989
- 9) 嶋津峰眞, 生澤雅夫, 中瀬 惇: 新版K式発達検査法, ナカニシヤ出版, 1985

(平成2年10月11日受理)

Summary

Purpose of this study is to make assessment scales on infants voluntary behavior when they play with toy materials.

I. Toy materials are ① paper and pen, ② performance box made of milk pack, ③ ten blocks (one block sized of 2.5×2.5×2.5 cm), ④ two lamps of plasticine: One is red color and the other is white.

II. Way of presentation: Present all of the prepared toys and say, "Let's play with these things yourself". Examiner stays facing infant and observes with no help.

III. We divided into 5 scales for this new assessment from our observation as follows.

A. How to manage the things 1 ① Sensuous-motor behavior: Infant can't deal with materials by original uses. But such as putting into his mouth. Throwing down them. Beating with them. ② Descriptive behavior I: He deals with them by original uses. Although his behavior is immature. ③ Descriptive behavior II: His expression shows his feeling.

B. How to manage the things 2 ① Singles toy: He deals with only one thing. ② Connection of plural toys: He deals with more than one things at a time.

C. Symbolic function 1 ① None of gesture behavior: He does not make gesture in his expression. ② He makes some gestures in his expression.

- D. Symbolic function 2 ㉑ None of likened behavior: He doesn't liken the toys to thing he wants to express.
㉒ He dose the behavior.
- E. Naming ㉑ None of naming: He doesn't give a name to his composition. ㉒ he dose naming.